ほない歴史通信
第３号
1997.6.1

民話への誘い

大子地方は、東は久慈山地、西は八溝山地が走り、その間を久慈川が流れる山紫水明の地であります。人々はこの地域の中で、昔から農林業や商工業などを営みながら地域の伝説や昔話などの民話を語り継いできました。

伝説は、具体的な事物、時代、場所などをもとに語られます。その内容などについては全くの史実ではありませんが、語る人も聞く人もある程度信じますので、真実たらしめるために合理化される傾向があります。

昔話は「むかし、むかし：」ではじまる架空の世界でありますので誰も信じようとはしませんが、主人公の振る舞いやその心情は多くの人々の心を打つものがあります。

大子地方の伝説や昔話について、ここでは具体的に述べることは出来ませんが、二・三例を紹介しましょう。

伝説では、地名、地形、石、川、沼、城館、屋敷、動物、信仰などに関わるものがあります。地名では、源義家が奥州征伐の途中、弓を取って矢を放った弓取り峠（大生瀬）、その矢の着いた先で矢を祀ったから矢祭（矢祭町）、地形では巨人の大太坊（ダイダンボー）が袋田と生瀬の境の山を取り払おうとして背負い、踏ん張って出来た窪みが生瀬滝、石に関わる伝説では弘法大師が巡錫の折、腰を掛けた腰かけ石（初原）、徳川斉昭が地方巡村の折、滝の麓で鹿狩りをしたときに腰を掛けた鹿待巖（袋田）などの伝説があります。

昔話には、動物や人間が主人公になって振る舞うお話や人あるいは動物のおろかな行動・ユーモアを主題にした笑い話などがあります。狐を人間に見立てた動物昔話の一つに『甚兵衛山のきつね』があります。この話は『日本の昔話』の中の一つとして、テレビなどで放映されましたのでご存知の方が多いと思います。猟師に追われた狐が、独り暮らしの甚兵衛爺さんに助けられ、後で若い女性に化身して、病気になった甚兵衛爺さんの看病にあたるという恩に報いるお話です（上岡）。これとは反対に狐に恨まれ仕返しを受ける昔話があります。古狐が山鳥を捕り、口にくわえていたのを見た農家の主婦が、狐を追い回して山鳥を奪い取り夕飯のご馳走に家族で食べてしまったので狐の仕返しに合い子どもが死に、埋葬した子どもの遺骸が翌朝軒下に放り出されてあったという悲惨なお話です（下野宮）。

親孝行の若者が長者になった昔話もあります。母に死なれ、病気の父を抱えた親孝行の若者が、父の食膳に供えるために鰐が淵で釣りをしていると、竜の化身である白髪の老人が現れて打出の小槌を与え、それを振ると願い事がかない長者になったというお話です（袋田）。

このように昔話には、人間として生きる大切な道徳的、教訓的なものが強調されております。戦前生まれの方なら年中行事の際や祝祭日等に、何らかの昔話をしつけとして聞かされた記憶があるものと思います。近年は核家族化や映像文化の発達、社会環境の変化などにより、文化遺産としての伝説や昔話が語り継がれなくなり消え去ろうとしております。遊史の会としても今のうちに採録したいと考えております。よろしくご協力をお願い致します。

（小澤）

【ふるさと写真帖】

りんごづくり事始め

数ある大子町の特産品のなかで、秋の風物詩としてすっかり定着したのがりんごです。町内に六十軒ある観光りんご園には毎年多くの観光客が訪れ、りんご刈りをしてあの甘酸っぱい味と独特の香りを楽しんでいます。

さて、りんごの苗木が初めて大子の地に試植されたのは昭和十九年三月のことでした。旧生瀬村小生瀬に住む黒田一さんが、自然条件にあった新しい作物を開拓しようと試みたもので、早生種の祝、旭それぞれ百本ずつが植えられました。

一さんの、りんごを成功させたいとの意志と情熱を受け継いだのが、長男の黒田宏さんでした。今は大子町の町長という重職にある宏さんは、当時を振り返ってこう語っています。旧制の太田中学校を卒業した「私は、農業を勉強したわけではありません。素人だからりんごをやったんです。私が農学校を出ていたら、恐らくりんごは考えなかったんじゃないでしょうか」。こうして、戦争が終わるとともに、学校を卒業して間もない「素人」である宏さんのりんごづくりが始まります。

りんごの栽培技術についての知識は皆無でしたから、まずその知識を身につけなければなりません。宏さんは、長野県や福島県の園芸試験場を尋ねて情報を得、またそこで紹介してもらった先進農家を尋ねて細かい技術を学んだそうです。剪定、摘果、夏場の管理等々、その作業が行なわれる時期に、最初の数年間は一人で、後にはグループで農家を訪問し、知識を吸収したとのことです。東北地方の各県は全て歩き、とくに福島県へはよく行ったそうです。

そうした勉強を重ねていた頃の一こまが、上の写真（黒田宏さん所蔵）です。昭和二十五、六年の頃に、生瀬農事研究会のメンバーが、福島県伊達郡湯野町（現在は福島市）のりんご農家を尋ねた時のもので、前列の右から二人目が宏さん、その左隣が当主の菱沼さん、その隣が同行した農業改良普及員だそうです。先進農家の現場で見聞した事柄が、しかしそのまま生瀬での栽培に活かせるとは限りません。失敗をいろいろ経験したようです。失敗すると、また農家にいって対処の仕方を聞いてくる、そしてそれを次の年に応用する、まさに試行錯誤の連続でしたが、こうして、技術は少しずつ定着していきます。

りんごの収穫がみられるようになったものの、今度はりんごをいかに売るかが問題でした。昭和三十年の頃、茨城交通が竜神峡とりんご園めぐりを企画しますが、販売に苦労していただけにこの企画は「ありがたかった」、と宏さんは回想しています。今では当たり前になったりんご刈りの、これが出発点でした。りんご生産は、草創期から発展期へと移ります。（斎藤）

【文化財散歩】

如信上人終焉の地

大子町上金沢字寺内

浄土真宗の開祖親鸞の孫で本願寺第二世とされた如信は、嘉禎元年(一二三五)の生まれと伝えられ、成人の後東国に下り常陸国を経て陸奥国に入り、ノ網の地に庵を結んで念仏の教えを説き広めました。やがてそこには大きな門徒集団が形成されて行きました。この門徒の一人で如信の一番弟子の乗善房は、正応二年(一二八九)当時陸奥国に属していた金沢の地に草庵を結びました。この地は陸奥国産金の地の一つとして知られ、草庵近くの鎌倉館山頂には金掘りたちの信仰する太子堂があり、如信はこの太子堂を道場として乗善房に守らせたと伝えます。乗善房が草庵を結んだ折り、如信がこれを記念して手ずから植えたといわれる榧の大木が今も数百年の時の流れを刻んでいます。

如信は、毎年十一月には京都大谷に上り宗祖親鸞の報恩講を勤めていました。正安元年(一二九九)十二月、報恩講を終えて大谷からの帰途、如信は乗善房の招きで金沢の草庵に入りましたが、しばらくしてのち病床に臥し、翌正安二年(一三〇〇)正月四日亡くなりました。金沢の草庵にはおそらく乗善房らの手により如信の廟宇が設けられたことでしょう。応長二年(一三一二)には、覚如上人(本願寺第三世)が如信十三回忌の法要を修したとされ、その折りに植えたといわれる銀杏の大樹の根元は如信の墓所となっています。また近くには乗善房の墓もあります。

その後の金沢草庵の経緯は明らかではありません。江戸時代になって、延宝二年(一六七四)水戸藩主徳川光圀はこの地に二〇石の寺領を寄進し、寺観を整えたとされます。金沢の草庵と如信の廟宇はおそらくこのとき新たに寺院として改修され、新堂宇が建立されたものと思われます。堂宇には光圀の寄進とされる塑造の如信像が安置され、同時に鎌倉館山頂の太子堂もこの一画に移されて、新たな木造の聖徳太子像がおさめられたと伝えます。現在この地は如信上人御廟所・法龍寺として整備され、終焉の地としてのほか如信上人坐像や聖徳太子立像、如信上人お手植えの榧などが町の文化財に指定されています。(井上)

木造　聖徳太子立像

塑造　如信上人坐像

［資　料　紹　介］

大子町外大野の藤田中氏所蔵　「往来証文之事」

常陸国水戸久慈郡外大野村
百姓喜八良父伊右衛門夫婦

一　此者義、心願ニ付、坂東札所為順礼、致他国候間、万一行懸リ病気、亦者、不従何事、指支候義、有之候節者、其御国御村之御法を以、御取扱、可被下候、依而如件

右村庄屋貞蔵（印）
組頭重三良（印）
同　軍蔵（印）
同　小平治（印）

弘化二（一八四五）年巳三月

国々村々御役人中様

これは「往来手形（通行手形）」と呼ばれるものである。旅行に際しては公用、私用を問わず、諸国の関所・番所（領内の物産の他領流出防止、旅人の監視）の通過する時に、自分の身分を証明する往来手形が必要であった。そこには所持者の住所や名前、旅の目的などが記され、同行者があれば連名とした。おもに町役人・庄屋・檀那寺などが発行し、それは旅行者保護と行政取締の目的を兼ねていた。本文では、心願（神仏などに心の底からかける願）のために坂東札所（日輪寺・佐竹寺など三十三か所）めぐりを目的としている。もし急病で行倒れとなった時はその土地の慣習によって埋葬し、行暮れになった時には宿を依頼し、「諸国村々御役人衆中様」と結んでいる。

庶民の旅は、この様な覚悟を懐にしてのものであった。

これは、一枚の紙切れにすぎないが、旅行者の安全を保証し、旅行中は、片時もはなすことがなかったであろう。伊右衛門夫婦のさまざまな思いを、今に伝えているのである。（野内）

【編集後記】

ウノハナ（ウツギ）が匂い、ホトトギス、カッコーの声で目が覚める今日このごろです。先日は、左貫の「奥久慈茶の里公園」へ行ってきました。茶畑に囲まれた中、世界のお茶、日本のお茶の歴史をはじめ、大子の奥久慈茶を紹介する「展示館」を見て、数寄屋造りの茶室で、抹茶をいただいてきました。

「昨夏の干ばつや、生育北限ゆえの悲しさで、四月に入っても、なお、何回かの厳しい晩霜があり、新芽の伸びはやや遅れぎみとなっております。しかし、寒さ以外にはお茶にとっての豊かな自然環境に恵まれておりますので、今年も地の利を生かして、高品質の新茶を」収穫できたそうです。

皆様、お変わりございませんか。「ほない歴史通信」第三号をお届けいたします。

本号には、民話や奥久慈のリンゴ、如信上人などについて掲載しています。特に、民話は、古老に今聞いておかなければ消えてしまうものです。大子地方には、豊かな自然と伝承や民話などが伝えられています。私たちの子や孫の夢をはぐくみ、心豊かな成長を願って、今後とも努力したいと思います。（野内）

編集人　斎藤典生（茨城大学人文学部）
野内正美（茨城県立歴史館）
石井喜志夫（元教員）
小澤園彦（元教員）
井上和司（大子町社会教育課）

編集発行　遊史の会
大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地
TEL　〇二九五七－二－二六二七